

文化でひらく未来への扉

「文化政策を振り返って

高野之夫区長インタビュー

1999(平成11)年の区長就任以来、「文化によるまちづくり」を掲げ、さまざまな文化施策を展開してきた高野之夫区長。財政難の中、なぜ「文化」を打ち出したのか、区長を突き動かしたものは何だったのか。その原点をたどり、これまでの歩みを振り返るとともに、今後のビジョンまで語っていただきました。

インタビュー…吉本光宏(ニッセイ基礎研究所主席研究員・芸術文化プロジェクト室長)

これまでのこと

「文化によるまちづくり」の原点にあるもの

——文化政策について振り返るといことで、区長就任前の文化によるまちづくりに対する思いをお聞かせください。お父様の代から古書店を営んでおられたとうかがいました。

高野 父親は古書店を経営する一方で、町会長も務めていました。私はいつも本に囲まれている環境で育ちました。大学2年生の時に父親が亡くなり、店を継いだわけですが、古書店の商売のおもしろさは、価値を決める、というところにあります。高ければ売れないし、安ければ同業者が買ってしまう。いわばプライスリーダー的な部分があり、目利きが重要となります。

——古書店主が本を選び値付をするという行為は、美術館や劇場が、作品を選定、評価して、社会的価値を与えることと似ていますね。また、かつて池袋に本店があった芳林堂書店に出店されていたそうですね。

高野 15年間、芳林堂書店の7階に店を構えていました。オーナーから言われたのは、店の価値を高める本屋を求めているということ。新刊書店のなかに古書店を出すという勇氣ある試みで、稀覯^{きこう}本や限定本などを充実させ、新刊書店にはない魅力を出そうと力を入れていました。芳林堂は文化を育てるとい意識のある書店で、閉店したときは池袋の一つの文化が消えてしまったというような寂しい思いがしました。

このように本に絶えず接していたことは、文化への興味につながっています。充実した図書館を



高野之夫（たかの・ゆきお）
1937年豊島区生まれ。
豊島区立池袋第五小学校
卒業。60年立教大学経済
学部卒業。83年5月～89年
6月豊島区議会議員（2
期）、89年7月～99年3月
東京都議会議員（3期）、
99年4月、豊島区長に就任。

つくりたいという思いもあり、ゆくゆくは図書館長になろうと思っ
ているくらいなんです(笑)。

台東区のまちづくりを間近に見て

——その後、区議になられますが、台東区の内山元区長の影響が大きかったと聞いています。

高野 古書店経営の傍ら区議会議員になりました。池袋は、戦後の闇市の勢いによって発展してきた歴史があります。そのため、良い方向に変化するための都市再生に遅れた感がありました。

住民は池袋を良いまちにしたいと真摯に考えており、私は地元から期待され、区議会議員になったんです。しかし、思いは強くても具体的なビジョンは少なく、まちの人からは、しっかりとしたポリシーや目標を持ち、期待に応えて勉強しなさいと言われました。そして、文化を中心にしたまちづくりをしている例として台東区の内山榮一さん(元台東区長*)のところで修業したらどうかと教えていただいたのです。ユニークなアイデアマンで、バブル前の財政が豊かな時代に、思い切った行政改革をしながら文化を中心としたまちづくりをしている区長でした。私が「鞆持ちをやらせて下さい」とお願いすると、豪快に「いいよ」とおっしゃったことを覚えています。

内山さんは当時から学校統廃合を行ったり、上野浅草の江戸文化の歴史を支えながら政策を進めたりしていました。平山郁夫さんや永六輔さん、黛敏郎さんなど文化人との交流もありました。「文化のない所にまちの発展はない」と絶えず口にしていて、私も、豊島区を、最終的には文化が光り輝く台東区のようにしたいと考えるようになりました。30年前、一区議会議員だった私が、本気で

※1

内山榮一

(1991—2012)

台東区議会議員、東京都議会議員を経て、1975

年台東区長に初当選。

93年4月まで4期16年にわたり区長を務めた。住民参加の区政を推進、独創

的な文化観光施策で「アイデア区長」の呼び名で親し

まれた。

区長になりたいと大それたことを思ったのです。

そうして区長になったわけですが、就任して初めて、豊島区が惨たんたる財政状況だということを知りました。1990（平成2）年の段階では、財政状況もよく区の借金もゼロでした。99（平成11）年、私が区長に就任したときには借金が872億円もあり、庁舎を建てるための貯金も使い果たして、実際に使える貯金は36億円のみで、区民一人当たり33万6千円もの借金があったのです。

90年から99年の10年間ではほとんど人員削減をしていませんでしたので、約3000人あった人員を、この10年間で約2000人まで減らしました。人を減らせば、事業を減らすとともに、施設も減らさなくてはなりません。これが基本的な構造改革として取り組んできたことです。

いまでは、借金が約270億円、区民一人当たり3万円ほどにまで縮小しました。こうした状況の中、経営努力をするのは当然のことですが、将来への目標をもつことも大事でした。その時に文化が重要だと思ったわけです。景気が悪くなるとまず文化予算を切ると考えがちですが、私は逆だと思っています。

大胆な組織改革を行い、文化を主軸のひとつに

高野 私が区長に就任した当初は、区長部局の中で文化政策を専門とする組織はありませんでした。それを何とか内側から変える努力をしました。文化政策の専門組織として、2001（平成13）年度に地域文化課、03（平成15）年度には同課を継承する文化デザイン課を設置しました。

その後、文化と産業部門とを融合させるため、2006(平成18)年度に文化商工部をつくりました。図書館については、教育委員会から区長部局の文化商工部に管轄を移しました。現在、文化商工関係の担当職員が90人近くもおります(P24〜26参照)。加えて、(公財)としま未来文化財団(P86〜93参照)もあります。

図書館を区長部局に移管した後、サービス業なのだから中央図書館は24時間、年中無休にせよと指示しました。しかし、やはりコスト面などの諸事情があり、現在は22時まで、休館日は月2回という体勢で開館しています。移転前の中央図書館では、1日平均1000人だった利用者が、現在では1日平均3000〜4000人まで増えました。おそらく、今後、日本一の来館者数を誇る図書館になるだろうと期待しています。

あうるすぽっと(豊島区立舞台芸術交流センター・P62参照)をつくったときも、「最初から赤字を出すような文化政策をなぜ進めるのか」という意見がありました。しかし最初から赤字という考えを持っていたら、文化は育ちません。文化はすぐ答えが出るものではなく、投資をすることでまちが育ち、文化が育ち、結果としてまちが賑わい、収入や財政状況も変わってくるのです。

——ぜひ、全国の自治体の首長にこのインタビューを読んでほしいですね。高野区長のように文化に対する方針がぶれなければいいのですが、やはり、文化よりも福祉に力を入れるべき、といった議論になりがちではありませんか。

高野 行政の基本はやはり、教育と福祉だと思います。その上で文化や環境、健康政策などを展開

していく。確かに組織として文化に比重がかかっているわけですが、文化というものは何度も申しますように、すぐに効果が現われるものではありません。ぶれずに続けることによって素敵な人が集まり、賑わう。それに、何よりもお金をかけていないんですよ。

就任当時の財政はひどい状況でしたが、その情報は外に出ていませんでした。そこでまず、すべての情報を出すよう指示しました。財政白書、人事白書、施設白書というようにすべての情報を出してもらい、状況を把握しました。財政破綻寸前だったんです。もし財政が破綻したら、豊島区に住む人は誰もいなくなってしまう。

—— 財政再建への切り札が、なぜ「文化」だったのでしょうか？

高野 決してハコモノをつくる気はありませんでしたし、財政状況からも無理でした。しかし文化政策を進めることで、我々の意識が変わり、まちに元気が出ると思いました。「感動」は文化からでないといけない。不安があったことも事実です。どうしたら、文化が育つ土壌がつかれるか、「ふるさと豊島を想う会」^(※2)で文化人が集まり意見を交わすうち、「文化政策懇話会」^(※3)を開いて、豊島区の文化政策について提言していただき指針にしたいと思うようになりました。

そんな時、「文化は人を元気にする、そして元気な人が元気なまちをつくる」という福原義春さんのお言葉に感銘を受けました。福原さんは日本の文化を代表する方ですから、ぜひ文化提言のための懇話会の座長をしてほしいと頼みました。しかし、福原さんは銀座の方で、豊島区や池袋をよく知らないということでした。また、実際に提言を出しても、行政は他人に書類をつくらせ、できあ

※2

ふるさと豊島を想う会
2001年5月発足。「現在ある装置や環境を創意工夫で十二分に活用し、これまで市井に隠れ、孤立している知識人たちが、分野を越えて連帯し、相互の世界を理解し、協力して新しい構想力を生む」(趣意書より)ことを目的に2カ月に1回開催。「同人たちの居酒屋での放談会から始める」とあるように、参加者(もしくはゲスト)のひとりを中心に話を深めていき意見を交換するというサロンのなものとて機能した。

がったら机の上に積んでおくだけ、実現しないので結局時間もお金も無駄になってしまうという理由で一度はお断りされました。

—— 福原さんは、他の自治体にも同じ事をおっしゃったそうですが、豊島区のことを他とは様子が違った、と提言書の書きで書かれています。

高野 熱っぽく語り何度も説得を続け、最後は「提言をいただいたら、私はすべてを賭けて、提言通り文化行政を続けますし、絶対に実現するので、福原さんどうか見届けて下さい」という殺し文句で、文化政策懇話会の座長を引き受けていただき、8回すべての会議に出席いただきました。そして、皆で決めた事柄を実行しました。庁内の組織改革は相当なものになり、役所の組織のなかでは抵抗はあったと思います。しかし、自分がやる限り、文化政策はぶれずにやりたいと思いました。文化行政を継続させるために必要なことは

—— 台東区の内山区長の時代、名物区長として世田谷区長の大場啓二さん※4も有名でした。大場さんは7期、内山さんは4期、区長を続けられました。

高野 名物区長だった2人が2人とも文化に力を入れているのが象徴的です。逆に言うと、文化行政に熱心ではない区長は短命に終わるのかもしれませんが。わたしも区長を長くやらせてもらったので、こういう形の展開ができた面もあります。

—— 「文化行政に熱心でない区長は短命に終わる」、名言ですね。大場さんは世田谷区長の時に、

※3
文化政策懇話会 2002年9月設置。企業メセナ協議会会長の福原義春氏を座長に、オフザパーを含め計20名のメンバーで構成。

※4
大場啓二
(1923-2011)

東京都経済局を経て世田谷区役所に配属。1975年、世田谷区長に就任。7期28年という長期にわたって区政を牽引し、文化を中心とした「世田谷モデル」をつくり全国へ発信した。

福祉や教育と比べて、文化の方が幅広い区民がアクセス可能で、区民全員に税金を還元できる良い方法なんだ、というようなことをおっしゃっていたのが印象に残っています。ただ、世田谷の施策は、80年代は美術館を、90年代は劇場を新しく建てるというものでした。それに対して豊島区は「まず」にしますが「創造舎」から始めました。遊休施設を再利用し、NPOと組んでソフトから着手するというのは、全国的に見ても先駆けですし、時代と共に歩んでいる気がします。

高野 ありがとうございます。「にしがも創造舎」は、廃校施設利用のまさに先駆けで、全国的な発信力のある事業を展開しているとともに、地域を意識した取り組みもさまざま実施していただき、高く評価し、また、感謝しています。

「あうるすぽっと」を計画していたときに、小田島雄志先生と意見を交わしたことが忘れられません。小田島先生は、この館を育てるには、3年間、集客率が5割か6割かでも我慢しなさいと言われたんです。でも僕は意地でも毎回満席にしたかった。区長としては文化を広げるのが役割だと思っっていますから。劇場の席を埋めることが大事で、観客と役者が一体になって、はじめて感動が生まれるんだと思っています。

—— 都内の劇場のなかでも、「あうるすぽっと」は活発な事業展開をされていますね。

高野 柿落としを4回も行いました。それで必死でチケットを売りました。参加してもらうことは、文化行政を進めるうえで重要なことです。でも無料で見てもらうのでは意味がない。高くてもチケットを買い、足を運んでもらわないと、と思います。

区民が参加し、協働する賑わいのあるまちへ

——「あつるすぽっと」のオープンと前後しますが、文化創造都市宣言（2005年・P28参照）を行ったときの思いは？

高野 文化政策懇話会終了後に、文化によるまちづくりへの決意をあらためて表明するという意味で文化創造都市宣言を行いました。宣言の際には、区民への浸透の意味も込めて、豊島区の振興発展に貢献された54の団体を表彰しました。文化政策は施設をつくっておしまいでないので、行けども行けどもなかなか到達しないというところがいいがあります。豊島区の文化政策に関して、溝口禎三さんの著書『文化によるまちづくりで財政赤字が消えた 都市再生豊島区篇』（※5）に詳しく記載されています。

——文化を基軸とするまちおこしはヨーロッパで行われている「創造都市」（※6）と同じです。工場の移転などで失業者が増え荒廃したまちを再生するときに、文化がキーになりました。豊島区には、実は地域にもいろいろな文化資源があり、その振興にも力をいれていますね。

高野 豊島区は狭い地域の中に、実に多くの文化資源や地域の催しがあります。また、みんなが参加し協働するというのは豊島区のモットーでもあります。ですから、それぞれの地域の文化を活かしながら、区民の方にも積極的に参加してもらうことが大切です。地域の方によるまちづくりのひとつの良い例として、池袋西口公園の野外ステージの設置があります。これは区民の自発的なカン

※5 「文化によるまちづくりで財政赤字が消えた 都市再生豊島区篇」2011年めるくまーる刊。溝口禎三氏は「ふるさと豊島を想つ会」事務局長。

※6 創造都市（クリエイティブ・シティ）産業構造の変化等によつて衰退した都市の空洞化や荒廃が浮き彫りになるなか、欧州では文化芸術の創造性を活かした地域活性化や産業振興策により都市を再生させた成功事例が出現、創造都市という概念が形成された。

パで作られたものです。行政が一方的に押しつけるのではなく、まちを盛り上げようという自発的な意識のもとに設置されたものですから、絶えず催しが開かれていて、いつも賑わっています。

——池袋にはセゾン美術館、東武美術館※7もありました。高野区長が豊島区長に就任したのはセゾン美術館の閉館した年です。民間が日本の文化を引っ張っていた時代でしたが、歳月の流れを感じます。

高野 民間は景気の善し悪しに影響されます。バブルが弾けたら文化については一番先に撤退でしょう。しかしながら、豊島区の経験を踏まえても、お金があるとき、景気が良い時に文化が育つわけではなく、現在のように財政状況が厳しい大変なときこそ文化が栄えるきっかけがあると感じます。

——最後にこれからの展望をお聞かせ下さい。

高野 豊島区の文化によるまちづくりもようやく自他共に認められるようになってきました。2012年は区制施行80周年を迎え、教育も健康も大事ですが、安全安心がすべての面で必要だろうということ。「安全・安心な文化都市としま」をモットーにしています。

立て直しを図っているとはいえ、財政状況もまだまだ万全ではなく、これからの課題です。一方で、(仮称)芸術文化資料館を含む(仮称)西部地域複合施設の建設計画も進めていますし、新庁舎は隈研吾さんの設計です。ハコモノといわれるかもしれませんが、これらは必ず次の世代に評価されるだろうと思っています。最小の経費で最大の効果を生むというのが行政の基本です。かけた経費

※7
セゾン美術館 西武美術館
として1975年に閉館。
89年10月セゾン美術館に
改称。
東武美術館 92年開館、
2000年3月閉館。

の何倍も返ってくると区民に説明をしています。

——区長のお話を聞いて、フランスのナント市^{※8}のことを思い出しました。今のフランス首相のジャン＝マルク・エロー氏がナント市長だったときの文化政策は、文化予算に全予算の15%を投入するというものでした。その結果、とにかく多くの人がナント市に住みたいと思うようになった。優秀な人材が集まり、大学では最先端のバイオ研究が行われ、新たなバイオ産業も生まれつつあると聞きます。長期的な観点で文化に投資し、まちが大きく栄えたという例です。豊島区もそのようになつてほしいと期待しています。

高野 文化政策はすぐに効果が現れるものではなく、やはり長い目で見てもらいたい。いいまちをつくるために、文化政策を取り入れた豊島区の方角は間違っていないかと思つています。

(2012年11月12日収録)

※8

ナント市 フランス西部、ロワール＝アトランティック県の県庁所在地。1995年からクラシック音楽の祭典「ラ・フォル・ジュルネ」が開催されているほか、かつてのビスケット工場をリノベーションして市民参加型文化政策を推進する文化施設「リュール・ユニック」、大規模都市再生プロジェクトである「ナント島プロジェクト」など、積極的、革新的文化政策で知られる。

豊島区の文化政策の概要

豊島区の地域特性と地域資源

豊島区には、「池袋モンパルナス」や「トキワ荘」に象徴されるように、多くの芸術家が創作活動を行い、交流・切磋琢磨するなかで、新たな文化芸術を創造してきた歴史があります。また、地域にはそれぞれ個性ある文化資源が数多く存在し、多様な文化活動が活発に行われています。さらに池袋副都心は、わが国有数の巨大ターミナルを形成し、様々な文化芸術発信機能や賑わいの拠点となっています。

池袋モンパルナス

長崎・池袋西口界隈は、昭和初期に多くの芸術家が住み、創作活動を行っていたことから、パリのモンパルナスにちなみ、詩人の小熊秀雄が「池袋モンパルナス」と名づける。

マンガの聖地「トキワ荘」

手塚治虫、石ノ森章太郎、赤塚不二夫、藤子不二雄^㉔、藤子・F・不二雄などが創作活動を行ったマンガ文化の源流。

舞台芸術と活字文化の発信

- 区立劇場あうるすぽっと、東京芸術劇場
- 廃校を活用した文化創造拠点
- 「にしすがも創造舎」
- 池袋演劇祭、フェスティバル/トーキョー
- 年間来館者約100万人の中央図書館

巣鴨地蔵通り商店街

年間約900万人が訪れる「おばあちゃんの原宿」

「ソメイヨシノ」発祥の地

染井村（現在の豊島区駒込）の植木職人が品種を改良してつくったといわれる。

巨大ターミナル池袋

一日の乗降客約250万人
年間約2800万人が訪れるサンシャインシティ

日本一人口密度の高いまち

面積…13.01km²

人口…約26万9000人（平成25年1月現在）

人口密度…ヘクタールあたり205.7人（平成24年

1月現在 ※平成21年には中野区を抜き日本一に）

駅が多く利便性の高いまち

人の動きが活発なまち

転出、転入による人口移動が活発

昼間人口は約42万人、夜間人口の約1.5倍（平成

22年国勢調査）。単身者が多く、約6割が単身世帯

豊島区の文化政策の体系

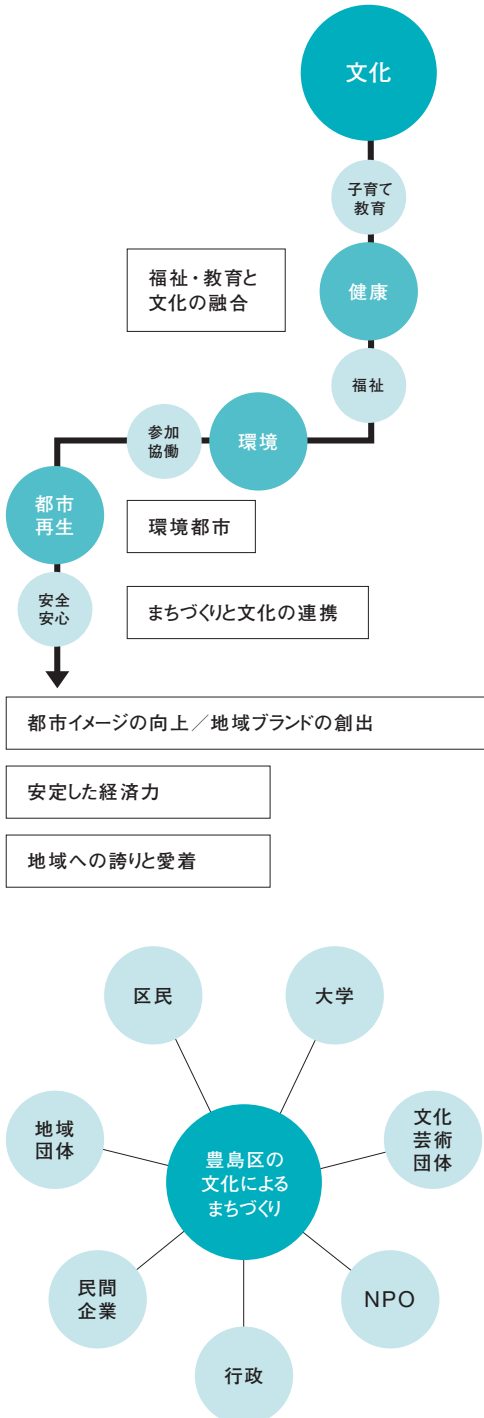
豊島区は、2002（平成14）年度の区制施行70周年を契機として「文化の風薫るまちとしま」の実現を目指し、「文化によるまちづくり」を進めてきました。そして、その取り組みが評価され、2002（平成21）年には「文化庁長官表彰（文化芸術創造都市部門）」を受賞しました。

一方で、「文化によるまちづくり」を確実に推進するため、「区政のなかで文化を重要政策と位置づけ、様々な形で文化政策の体系や推進体制を整備してきました。



豊島区の文化政策の特徴

教育委員会の所管ではなく、区長部局に文化商工部を設置し、文化と産業部門との組織的な融合を図っているのが特徴で、文化商工部には、文化政策の専門組織である文化デザイン課や図書館課などが設置されています（P26参照）。あらゆる政策分野の中心に「文化」を据え、さまざまな政策分野の融合を図り、総合的なまちづくりのデザインを行っています。まちづくりの推進にあたっては、区民、民間企業、大学、NPOなど多様な主体と積極的に連携・協働しています。



豊島区の文化政策に関する提言 豊島区における文化政策の方向 (抜粋)

2004(平成16)年1月 豊島区文化政策懇話会

基本方針

文化が牽引する都市の再生～ユニバーサルデザインを基調とする文化都市

- 文化的活動は、挑戦する精神と豊かな判断力を育み、人々の生活と環境に革新＝イノベーションをもたらすものである。
- 文化とは、人間がより良く生きようとする行為の過程とその結果である。それが活性化した時、地域とそこに暮らす人々はその成果を享受するとともに、都市を創造的に再生する総合力を有することになる。
- 文化・芸術活動をはじめとする一つひとつの事業や施策の存在意義を高め、より活性化させながら、人々の希求する生き活きと快適に暮らし続けることのできるまちづくりに、いかにしてつなげていくかという意識改革とその取り組みこそが文化政策である。
- 文化政策は、文化・芸術はもとより、区民生活・福祉・環境・教育・産業・まちづくり等、幅広い生活全般に関わるものであり、個別分野の施策として捉えるだけでなく、都市政策あるいは都市デザイン全体に関わる総合的な政策として位置づける必要がある。
- 様々な文化資源の再発見、再評価に努めるとともに、豊島区固有の産業集積と文化を結びつけ、新たな文化創造や産業の活性化につなげていくことが重要である。
- 豊島区らしさ＝豊島区独自の文化とは、区民、行政、NPO、大学、企業等、多様な主体が取り組む文化政策の集積とその結果にほかならない。区は、これからの文化政策の方向づけを明らかにするとともに、それぞれの主体が自律的に行う文化的活動への支援やネットワークの構築等、創造的な環境の整備を積極的に図る必要がある。

文化特区～文化クラスターによる創造的なまちづくりへの挑戦

〈文化と都市再生をキーワードとして築く「としま文化特区」構想〉

- 区内のそれぞれの地域において、多様な主体による創造的な文化的活動が活発に行われ、それが区民に享受されるとともに、まちづくりや産業、福祉、教育、環境、青少年育成など諸分野の施策とも結びついて、豊島区全体が活力をもって発展していくことをめざす。
- そのため、豊島区の地域全体を「文化特区」として位置づけ、上記の考え方により、様々な文化・芸術活動が円滑かつ活発に実践できるような仕組みと環境づくりを図ることが必要である。

〈文化クラスターの形成〉

- 本懇話会は、「文化特区」を具現化するための核をなす考え方として、「文化クラスター」の形成を提案する。
- 文化クラスターは、区内に点在する文化資源を再発見、再評価し、文化芸術を中心にこれら結びながら、まちづくりや暮らしの中に位置づけていく考え方であり、各文化クラスターそれぞれが関連をもち、相互に影響しあいながら新しいものが創出される仕掛けである。
- 文化クラスターは、区民も含め、次々と新しく発想していける構造をもち、他分野との交流・連携によって相乗効果を図るものである。
- したがって、本提言書に例示したクラスターにとどまらず、区民や様々な文化の担い手が発想を次々に加えていき、文化的活動の活発化を図りながら、多面的かつ重層的な文化特区を構成することが望まれる。

(以下、略)

施策の方向 ※骨子のみ掲載

- 『としま文化特区構想』実現のための3つの取り組み

1 芸術文化創造環境づくり

- 質の高い芸術文化創造環境の整備
- 文化の担い手、推進者等の人材育成
- 区政全般を牽引する文化政策の推進

2 パブリックライフを楽しめる環境づくり

- “広場・公園・通り”を文化活動の場として活用する
- 文化施設(公・民)の機能の活性化と連携

3 豊島区らしい風景づくり

- コンビニアルな(賑わいにあふれた)生活文化空間の創出
- 文化資源の再発見、編集、創造
- 新たな文化産業の創造

区制施行 80 周年に寄せて 豊島区の文化政策、その発展

(株)資生堂 名誉会長 福原義春 (豊島区文化政策懇話会座長)

私の豊島区との関わりは2002年、「豊島区文化政策懇話会」の座長をお引き受けしたことから始まります。しかし、最初にご依頼をいただいた際には、その有効性に少し懐疑的でした。私自身は銀座に本拠を置く企業の経営者で、豊島区とは何のゆかりもありません。また、それまで幾つかの地域の文化行政について意見を述べる機会がありましたが、骨折り損のように何の成果も実現されないことが極めて多かったからです。

しかし、高野区長の文化を基軸としたまちづくりにかける思いは極めて真剣なものでありました。私は高野区長の「提言をいただいたら、私はすべてをかけて提言に沿った文化行政を遂行します。絶対に実現するので、どうか見届けて下さい」という約束を信じ、豊島区のまちづくりにご協力することとなり、埼玉大学の後藤和子先生らと力を合わせ、平成16年1月に豊島区の文化政策に関する提言をさせていただきました。

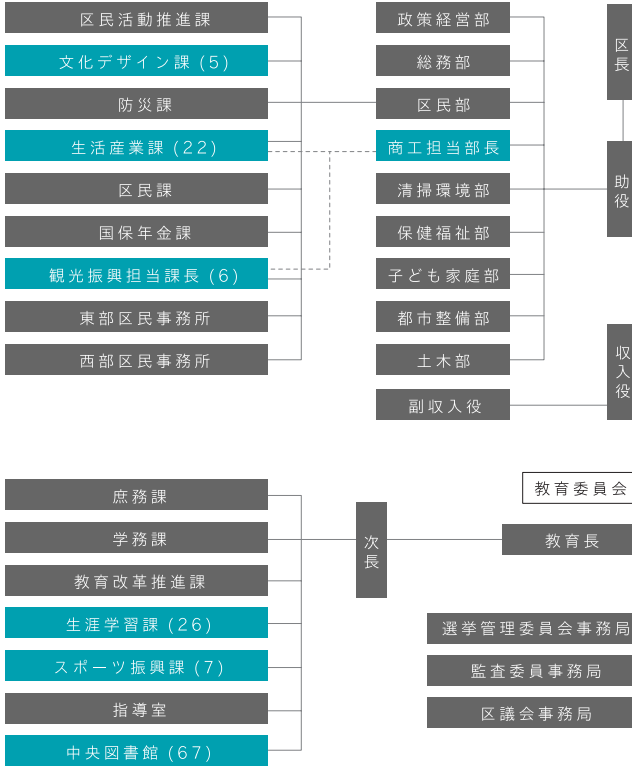
その後、区制施行80周年を迎えた2012年に至るまでの間、豊島区の文化政策の発展はまさに驚くべきものでした。2005年には文化創造都市宣言、2006年3月には文化芸術振興条例の制定、2007年には新中央図書館と舞台芸術交流センター「あうるすぽっと」の開設と矢継ぎ早に新たな芸術文化創造環境を整備するとともに、私自身顧問を務めさせていただいている「としま文化フォーラム」などにおいて文化の担い手育成にも積極的に取り組まれました。その結果として2009年1月に文化庁長官表彰〈文化芸術創造都市部門〉を受賞されたことが、高野区長の約束が実現したことの確かな証明であるといえるでしょう。

区制施行90周年、100周年と続く今後も、この10年間のまちづくりで育んだ基盤をもとに、豊島区で創られた豊かな文化が全国へ発信され続けることを願ってやみません。

文化部門と商工部門の組織的な融合、その流れ（平成15～24年度）

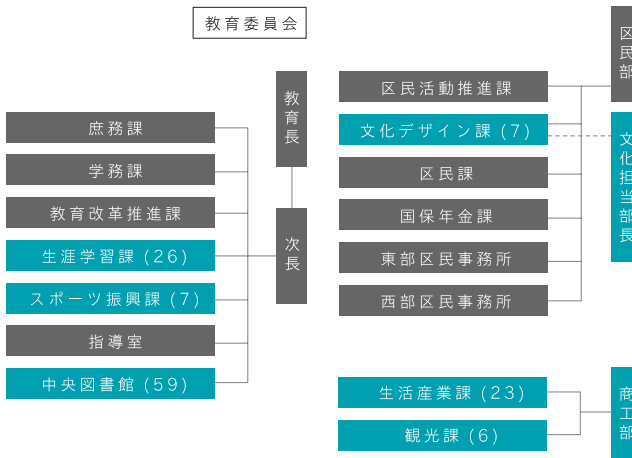
平成
15
年度

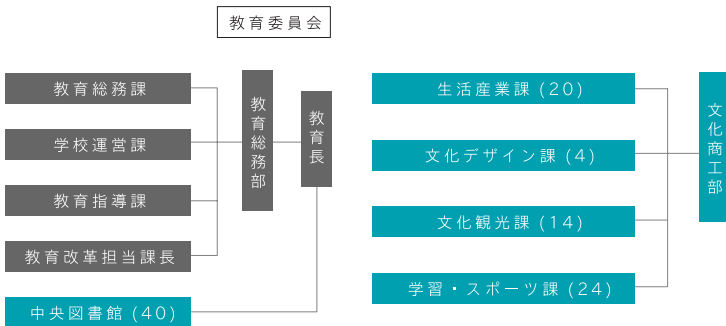
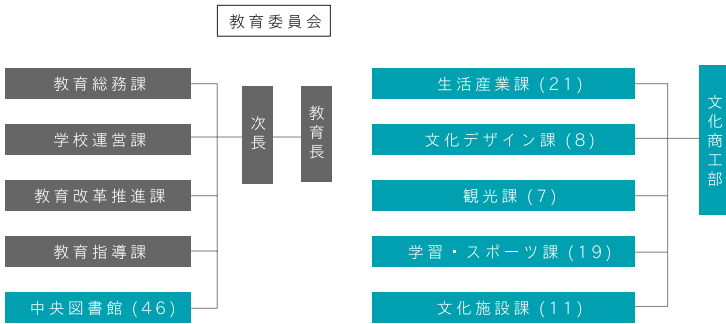
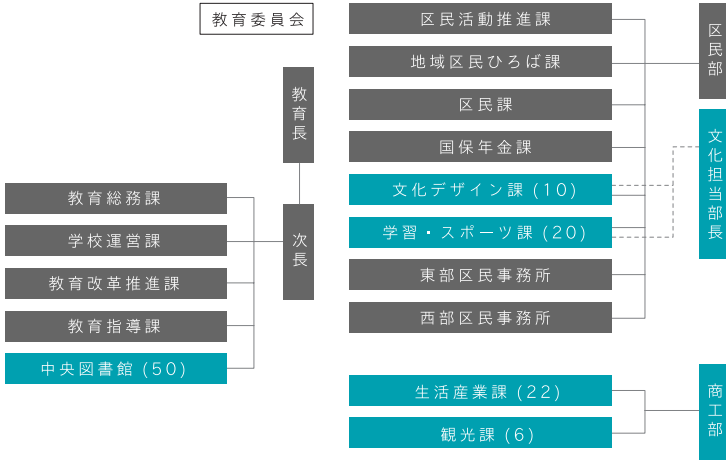
文化デザイン課新設・商工担当部長新設



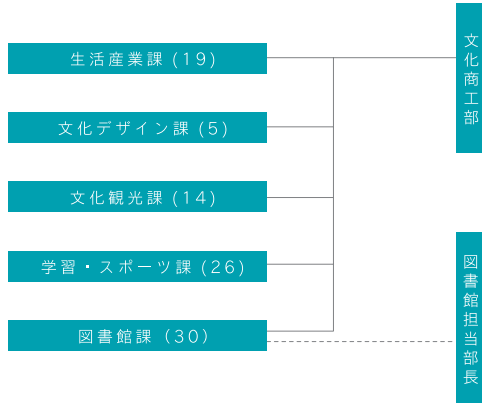
平成
16
年度

文化担当部長新設・商工部新設



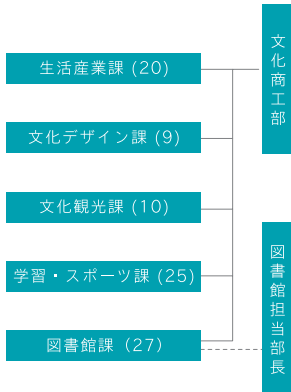


() 数字は職員数。非常勤・嘱託職員数は除く

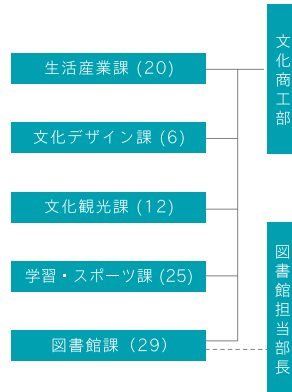


平成
20
年度

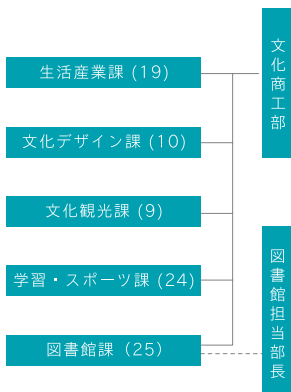
図書館事務を教育委員会から区長部局へ移管（地方自治法第180条の7の規定による補助執行）



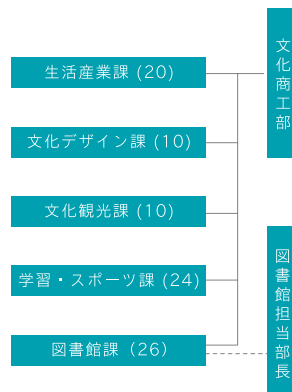
平成
22
年度



平成
21
年度

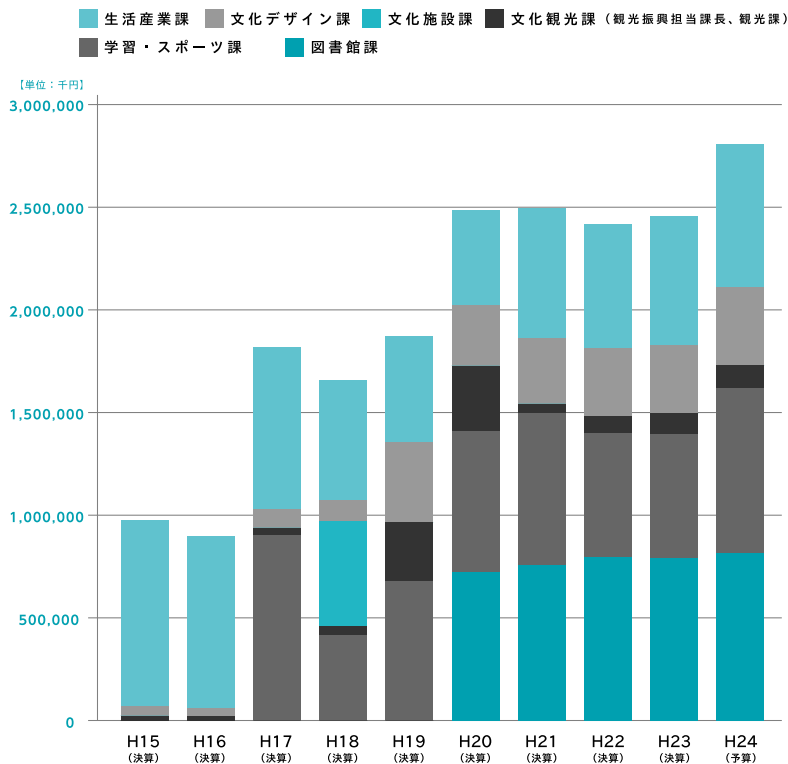


平成
24
年度



平成
23
年度

区長部局における文化工商担当組織の事業経費の推移



	生活産業課	文化デザイン課	文化施設課	文化観光課 (観光振興担当課長、観光課)	学習・スポーツ課	図書館課	合計
H15	906,687	46,047		22,619			975,353
H16	835,918	42,790		19,582			898,290
H17	785,063	91,891		33,711	904,617		1,815,281
H18	585,930	104,105	509,449	43,803	415,479		1,658,765
H19	520,124	390,587		284,367	679,249		1,874,328
H20	466,123	293,322		320,647	682,538	724,040	2,486,669
H21	632,618	320,349		45,647	737,135	759,329	2,495,077
H22	607,254	331,758		78,902	603,220	797,335	2,418,468
H23	629,837	327,110		102,574	603,535	791,446	2,454,503
H24	699,955	380,148		112,754	798,915	815,873	2,807,645

※各年度の増減説明書に基づき文化デザイン課作成。

※各部局の事業経費から施設建設経費、公有財産購入経費、工事請負経費及び大規模改修経費は除く。

※H15の生活産業課決算額から中小商工業融資事業経費貸付金は除く。

文化創造都市宣言

平成17年9月22日
告示第193号

わたしたちのまち、豊島区は、多様な人々が夢を描き、営みを重ねながら、彩り豊かな文化と芸術をはぐくんできました。

歴史と伝統を受け継ぎ、これを糧として、次の世代に伝える新たな文化を創造し、

世界へ発信することは、わたしたちの望みであり、使命です。

わたしたちが享受し、創造する文化は、癒^いしと勇気を与え、

生きる力をもたらし、まちに新たな魅力と輝きを生み出します。

わたしたちは、文化を通じて相互に理解し、共感し、尊重し合う心を育て、

人と人とのつながりを何よりも大切にしながら、あらゆる人々と協働し、

いきいきとした地域社会づくりを進めます。

未来に向けて、わたしたち一人ひとりが担い手となり、誇りと活力に満ちた文化の風薫るまち、

豊島区を築いていくことを決意し、「文化創造都市」を宣言します。

日本の将来と文化創造都市

文化庁長官 近藤 誠一

現在日本はもちろん世界のどこをみても、「こんなはずではなかった」という状況が続いています。金融と財政の危機、広がる格差、テロ、温暖化、高齢化など、複雑で相互に絡み合った問題が山積しています。国民の価値観が急速に多様化していく中で、政治はこうした問題を積極的に解決するための政策や制度改革を、国民の十分な理解を得て粘り強く実行していくのが困難な状況が続いています。

経済界やメディアなどを含む社会全体も、目に見える短期的成果にばかり目を奪われて、問題解決に必要な建設的かつ長期的な視野に立った政策や提言ができていないと言いき難い状況です。国民も国全体の長期的利益より目の前の自分の利益に関心をもつ、いわゆるポピュリズムに陥っている感があります。心の荒みは、教育の現場にまで及んでいます。これらが悪循環となって、人々の閉塞感は増すばかりです。

この状況を打開するのはたやすいことではありませんが、そこで鍵となるのが、文化芸術のもつ力と、都市のもつ軽快さです。文化芸術は、単に心を慰め、癒しを与えるもの、つまり「消費」するだけのものではありません。自分を表現し、他と対話し、連帯する能力と、固定観念から解放され、自由にひらめきを生む力を与えてくれます。問題に前向きに取り組み、解決を目指す力を一人ひとりに与えてくれる、極めて重要な「投資」なのです。問題解決のためには新しい政策の導入や制度改革が必要なことは当然ですが、同時にそれらを実施していくのはあくまで人間であること、その人間に十分な「やる気」と「モラル」が必要なことを忘れてはなりません。ここで文化芸術が大きな力をもつのです。

都市は、個人にこうした文化芸術の力を与え、活躍の場を与えてくれるのに相応しいサイズであると言えます。国は大きすぎて、市民の毎日の関心にきめ細かく応えることはできません。逆に都市は、地元につながる固有の伝統や歴史、文化財を活用しながら、才能あるアーティストその他の市民と共に、創造的な企画を実施し、市民の自信と誇りを取り戻し、若者を惹きつけて地域を活性化することができます。1980年代半ばの欧州で始められた文化創造都市の構想は、この点に着目した試みで、かなりの成功を収め、日本でもここ数年各地で試みが始まっています。

このように都市がそれぞれの特徴を生かしながら、文化芸術の力を個人と社会の力に変えていく流れが広がっていくことが、日本の明るく活気ある将来をつくる上で重要な役割を果たします。区制施行80周年を迎える豊島区が、この面ですでに先進的な取り組みをされ、実績を挙げておられることは大きな励みであり、全国の市町村などにとっておおいに参考になることでしょう。

豊島区の益々のご発展をお祈りします。

文化と産業が 循環する都市へ

後藤和子

〔埼玉大学経済学部・経済科学研究科教授〕

総合政策としての文化政策を

～2003年豊島区文化政策懇話会の

基本的考え方

私は、2003～2004年にかけて、豊島区文化政策懇話会の専門部会長を務めさせていただいた。折しも2001年には、1950年に制定された「文化財保護法」に次ぐ大きな法制度である「文化芸術振興基本法」が制定され、現代アートや舞台芸術、メディア芸術等の創造と享受を国が支援する機運が高まり、文化庁予

算も一千億を超えるようになっていた。私も2001年に『文化政策学』（有斐閣）を刊行し、文化行政ではなく、市民や企業も文化の担い手となる「文化政策」への転換を構想した。今日では、にしも創設舎のようにアートNPOが文化政策の重要な担い手であることはよく知られるようになったが、まだアートNPOなどほとんど知られていなかった頃である。

『文化政策学』では、また、「総合政策としての文化政策を」ということも主張した。文化は単に、文化団体や芸術家のためだけにある政策ではない。文化と福祉、教育、医療、産業、まちづくり等が密接に連携して、生活の質を高めるとともに、魅力的な都市空間をつくることのできることを考えたのである。

その本を当時、区民部の大沼映雄部長が書店で見つけ、私の研究室を訪ねてこられた。大沼部長は、私の話を聞いてくださり、文化政策懇話会の委員として、文化以外の分野からも豊島

区在住の素晴らしい方々を選んでくださった。福祉や都市計画、産業と文化をつなげたいという思いに相応しい委員の顔ぶれであったと思う。

地域固有の文化集積を生かしたまちづくり

文化資源マップの作成と文化クラスター構想

懇話会では、福原座長のもと、各委員から自由闊達にアイデアを出していただき、そのアイデアの裏付けとなる調査を行い、政策として具体化するのが私たち専門部会の役割であった。専門部会は懇話会の数倍の回数を開催し、大学院生と職員が自転車で行く区内を調査し、専門委員全員が、庁舎に日曜出勤して自ら政策案を執筆した。

ある時、懇話会の席上、粕谷一希（東京人）元編集長委員から、豊島区に元々ある文化資源を見直してはどうかという提案をいただいた。今こそ、文化資源を生かしたまちづくりや文化

政策の展開が当たり前になっているが、当時そのようなことを実際に実行しているところはまだまだ少なかったように思う。早速、専門部会では、豊島区にはどんな文化があるか議論し、食文化から歴史的資源、池袋モンパルナス、トキワ荘等を掘り起こして「文化資源マップ」^{※1}を作成した。

この文化資源マップは、その後、豊島区の文化政策を具体的に進めていく上で、役に立つばかりでなく、少くない大学の授業で取り上げられ、「あのマップを作ったのは、後藤さんたちでしたか」と言われることがよくあった。文化資源を活用した云々と言葉では言うが、具体的にイメージできるものを作成した意義は大きかったと思う。この文化資源マップを手がかりとして、点在する文化資源に新たな創造を加えて線として結び、ゆくゆくは面として、圧倒的な空間の魅力を作りたいと考えた。それが、「文化クラスター」という考え方であった。ク

※1

文化資源マップURL

<http://www.city.toshima.lg.jp/kusei/>

toshima.lg.jp/kusei/

ラスターとは、ブドウの房のような塊という意味で、いくつもの文化資源の塊が区内につくられ、それらがやがて相乗効果やシナジーを発生するという展望を描いた。

懇話会の提言書は、専門部会委員が全員で書いたもので、通常の行政言葉で書かれていない。そのため、担当者の方々は議会での説明にご苦労されたとお聞きした。しかし、文化政策を行政言葉で語っていても、いつまでたっても文化行政から文化政策へと転換できない。こうした試みを受け入れ、懇話会の提言をいつも大事にしてくださっている高野之夫区長には、心から感謝したいと思う。

豊島区の課題

文化と産業が循環する都市空間政策を

振り返ると、2003年以降、豊島区は、先進的な試みを次々とやってきたといえる。他の

自治体が参考にしたという声も聞くし、10年で本当に変わったという声も多く聞く。しかし、当初の構想から、まだ、実現できていないこともある。それは、総合政策としての文化政策の実現である。文化と福祉、文化と教育、文化と産業、そしてそれらの総体としての魅力ある都市空間の実現である。

特に、今後の課題としていただきたいのは、文化と産業が循環する魅力的な都市空間の実現である。この間、都市経済を牽引する産業として、クリエイティブ産業や文化産業への関心が高まっている。2009年には、東京都がクリエイティブ産業の実態調査を実施した^{※1}。私はその際にも、アドバイザーとして調査に加わった。

豊島区にも、少なくないクリエイティブ産業の集積がある。しかし、豊島区の産業政策は、製造業の中小企業支援や商店街活性化という従来の枠に留まっているのが現状である。残念なことに、文化商工部がありながら、産業政策の

※1

「クリエイティブ産業の実態と課題に関する調査」

(東京都産業労働局)

範囲と政策手法が古いままである。

クリエイティブ産業は、コンテンツ産業より幅広く、建築・デザインから従来のコンテンツ産業そして舞台芸術や工芸もその対象である。つまり、舞台芸術もある種のクリエイティブ産業である。文化ストックと他の投入要素が結びつけば、文化産業が生まれる。近年では、リゾートホテルにその土地固有の景観や風土、文化を取り込んで、ホテルの価値を高めたり、越後妻有や直島の実践等に見るように、伝統的な文化や現代アートは、地域活性化に不可欠の要素になりつつある。

今後は、文化への支援を、保護ではなく、文化活動を産業という目線で捉え直し、雇用を生み出し他の産業へと波及する投資と考えるはどうだろうか。産業は都市に活気をもたらす。長い目で創造性を育み、生活の質を高めると同時に、活気のあるクリエイティブ産業がどんどん生まれてくるような魅力的な都市空間の創出を目指してはどうだろうか。



©Tei jingjing

豊島区の文化政策の基本的な考え方

(豊島区文化政策推進プランより抜粋)

基本理念

文化政策がめざす「文化創造都市」とは、文化芸術活動のもつ創造性が地域経済を含めたまちづくり全般に波及していく姿です。

文化創造都市 としま

- 1 文化芸術を担う人材を育て、創造的な活動がまちの魅力と誇りを生み出す都市
- 2 文化芸術活動の成果や過程を身近に体験し、豊かさを享受できる都市
- 3 文化芸術の創造性がまちづくりへ波及し、さらなる活力にあふれていく都市



文化による地域力の創出

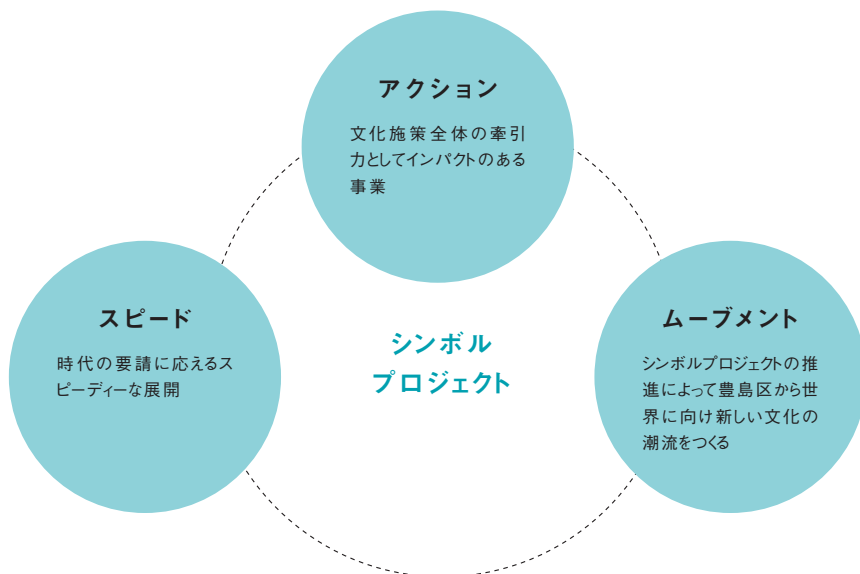
豊島区が誇る各地域がこれまで育んできた歴史的・文化的・人的な地域資源をまちづくりに活かし、地域の活力を生み出す。

- 目標1 質の高い文化芸術創造環境の整備
- 目標2 地域文化・伝統文化の継承と発展
- 目標3 文化を支え、発展させる人材の育成
- 目標4 まちづくり等との連携による文化政策の推進
- 目標5 福祉と教育における文化活動の展開
- 目標6 文化資源を活かした地域産業の活性化



文化創造都市としまを牽引するシンボルプロジェクトの展開

〈 シンボルプロジェクトの基本方針 〉



文化創造都市 としま

シンボルプロジェクトは豊島区の歴史・文化を再評価し、選択と集中による新たな未来を切り開くためのエンジンです



新たな都市文化創造の場づくり

池袋副都心の高い利便性に着目し、国内外へ向けたシティセールスのための交流拠点を設けます

地域文化の再生と 地域力の創出

豊島区が誇る歴史・文化の再発掘により、地域文化を再生し、内外へ発信します

他の政策分野との融合 による社会的課題の解決

さまざまな分野に及ぶ課題に対し、創造的な視点によって新たな解決策を導きます

廃校に花束を― 豊島区に息づく 創造都市のDNA

吉本光宏

〔ニッセイ基礎研究所主席研究員・芸術文化プロジェクト室長〕

体育館の片隅に飾られた小さな花束。

豊島区の文化政策を語るとき、真っ先に目に浮かぶ光景である。体育館とは廃校から生まれた「にしすがも創造舎」の特設劇場、花束はロンドンのバービカンセンターから贈られた国際共同製作のオープニングへのお祝いである。

その作品は、クウェートのスレイマン・アルバツサム・シアターの「カリラ・ワ・ディムナー王子たちの鏡」。東京国際芸術祭2006のメインプログラムのひとつとして、06年3月10日、にしすがも創造舎で世界初演が行われた。

ロンドンのシテイに立地するバービカンセンターは、欧州でも最大規模の複合文化施設だ。バービカンホール（1949席）をはじめ、バービカン劇場（1166席）、ザ・ピット（200席／可変）、3つの映画館、アートギャラリー、図書館などが設置されている。国際的な話題作も数多く上演され、ロンドン交響楽団、BBC交響楽団の本拠地でもある。

フェスティバル／トーキョーの前身、東京国際芸術祭（TIF）が東京国際舞台芸術祭を衣替えてスタートしたのは2002年。TIFは、03年から国際交流基金と共同でイスラムの舞台芸術を継続的に招へいしていた。「カリラ」は、TIFを主催するNPOアートネットワーク・ジャパン（ANJ）とバービカンセンター、イスラム美術館の国際共同製作事業として、スレイマン・アルバツサム・シアターに委嘱さ

れた。

周知のとおり、1990年代には全国各地で公立劇場・ホールが次々と建設された。10年間の新設数は何と1122館^{※1}。毎週2館を上回るペースで、都道府県や市区町村はせっせと文化施設をつくり続けた。果たしてその中に、海外の主要な文化施設と国際共同製作で世界初演を行ったところはあるだろうか。

一方のしずくも創造舎は、閉校になった朝日中学校を改修して2004年にオープンした施設である。豊島区が元校舎をNPOに無償で貸与し、教室や体育館が演劇やダンスなどの稽古場として廉価で提供されるようになった。劇場やホールなど公演会場に比して、稽古場や練習施設は絶対量が不足している。芸術団体の創造活動を支えることが、豊島区と協働事業として運営を担っているANJの基本方針である。

ANJは2005年、その体育館に最小限の舞台・照明・音響などの設備を設置して特設劇



※1
(財)地域創造「平成19年度 地域の公立文化施設実態調査」報告書、平成20年3月。ちなみに2000、2004年度の5年間の新設数は438館。

東京国際芸術祭2006
スレイマン・アル・バツサム・
シター
「クワエート」
「カリラ・ワ・ネイムナ・主
子たちの鏡」
© 松岡祐紀

場を開設。TIFのメイン会場をパークタワーホールや世田谷パブリックシアターからにす
がも創造舎に移して「カリラ…」の世界初演と
なった。

行政の理念とNPOの誇りが結実

冒頭の小さな花束は、アートNPOと協働し
て、新しい芸術を創造、発信していこうという
豊島区の文化政策の理念と戦略を象徴してい
るのである。それはまた、文化施設というハード
にばかりに投資をしてきた全国の文化行政に対
する痛烈な批評であり、理想を追い求めるア
ートNPOならではの誇りの証でもある。

日本では馴染みのないイスラム圏の作品を招
へいすることは、大きなリスクがあったはずだ。
国際社会の矛盾が凝縮されたようなパレスチナ
やイスラエル、クウェートで生まれた社会的、
政治的課題と向き合う舞台作品。それを提示す

ることで、日本の舞台芸術界に一石を投じよう
という果敢な挑戦をANJは豊島区の協力で
実現させた。現代社会における舞台芸術の意味
を問い続ける姿勢は、今もフェスティバル/
トーキョーに引き継がれている。

行政組織とアートNPOとの協働は、豊島区
に限ったことではない。遊休施設をアートセン
ターに転用し、運営をNPOに任せる動きは全
国に広がっている。しかし、それを継続、発展
させるのは簡単ではない。例えば2002年に
大阪市が立ち上げた「新世界アーツパーク事
業」。経営不振に陥った都市型アミューズメン
ト施設「フェスティバルゲート」の空き店舗を、
アートNPOに無償で提供するという画期的な
ものだった。しかし、市の方針転換で、10年間
の予定で始まった事業は07年につけなく打ち
切られる。

行政との協働事業がいかにか不安定か。この出
来事はそれを全国のアートNPOに印象づけた。

それでも、フェスティバルゲートで活動を立ち上げた3つのNPO(DANCE BOX、remo、こえとことば)とこのころの部屋・コールドム)は、他の場所に拠点を移して今もアクティブに活動を続けている。

実はにすぎずがも創造舎も、施設の老朽化に伴う体育館の耐震補強を予定しているが、豊島区は工事期間中も含め、ANJが活動を継続できる方策を準備中だという。

豊島区に根付く創造性と 区長のイニシアティブ

豊島区がアーティストの創造拠点となったのは、最近のことではない。昭和10年代の池袋周辺には、稀代の芸術家や作家、詩人など1000人を超える表現者が住んでいたという。若い画家たちのためにアトリエ付き住宅が建てられ、そのエリア一帯は「池袋モンパルナス」と

名付けられた。そこで創作活動に没頭したアーティストたちには、小熊秀雄をはじめ、長谷川利行、鬘光、松本竣介などの名前が並ぶ。

長崎一丁目には今でも当時のアトリエが一軒だけ残されている。近くには、熊谷守一の住居跡に建てられた熊谷守一美術館^{※1}がある。その1キロほど南には、昭和20〜30年代、手塚治虫や藤子不二雄、石ノ森章太郎、赤塚不二夫など日本を代表する漫画家たちが集う「トキワ荘」があった。残念なことに家屋は1982年に解体されてしまったが、30年が経過した今でも、トキワ荘跡を目指してやってくるマンガ家志望の若者やアニメファンは後を絶たないという。豊島区には昭和初期から創造的なエネルギーが渦巻いていたのである。

豊島区の文化的な拠点となった池袋には、1980〜90年代にかけて、西武美術館(89年にセゾン美術館に改称)、スタジオ200、サンシャイン劇場、東武美術館など民間企業の文化施設

※2

1985年、熊谷守一氏の次女・画家の権氏によって建てられた。2007年、権氏より収蔵する守一氏の全作品が豊島区に寄贈され、「豊島区立熊谷守一美術館」として再オープンした。

が集積し、日本の文化シーンをリードしていた。残念ながら今ではサンシャイン劇場を除いて、これら民間の文化施設は撤退してしまっただが、セゾン美術館の閉館した1999年に登場したのが、現在の高野之夫豊島区長である。

立候補に際し、彼は池袋ゆかりの「江戸川乱歩記念館の設置」を公約に掲げていた。大学2年のときに亡くなった父親から池袋の古書店を引き継ぎ、1983年に区議会議員に就任。池袋を文化で輝くまちにしたい、という思いが次第に強くなっていったという。89年に都議になり、当時、ユニークな文化行政を展開していた台東区の内山榮一区長に大きな影響を受ける。豊島区長を目指す決意をしたのはその頃だ。

99年に区長に就任後、まちづくりの基本方針として「文化と品格を誇れる価値あるまちづくり」を掲げる。が、当時の豊島区は文化行政どころではなかった。872億円の借金を抱え、財政状況は23区で最下位だということが明らか

になったためだ。公約の江戸川乱歩記念館はるか^{※3}、「文化でパンは食べられない」と区民や職員に大反対される。高野区長は財政の危機的状況をガラス張りにし、健全化に向けた大胆な構造改革を進め、職員数の大幅削減を断行した。

2000年には3000人近くだった職員を10年間で約2000人に削減、実質的借金ゼロを目指せるまでにこぎ着けた。しかしその過程でも、豊島区を文化都市として生まれ変わらせるといふ区長の信念が揺らぐことはなかった。01年には雑誌『東京人』（都市出版発行）の生みの親である粕谷一希氏を会長に「ふるさと豊島を想う会」を創設。各界の第一人者を講師に迎え、これまで50回以上の講演会や会合を開催してきた。

2003年には「豊島区文化政策懇話会」を設置、翌年1月にその提言を受け取った。座長を務めた福原義春資生堂名誉会長は、自治体の文

※3
その後、旧江戸川乱歩邸と土蔵（幻影城）は、立教大学の創立130周年事業として2004年8月に公開された。

化行政に懐疑的で、一度は就任を断わったものの、高野区長の真剣さと熱意に翻意したのだという^{※4}。07年、東池袋には新中央図書館と舞台芸術交流センター「あうるすぽっと」がオープン。翌年、豊島区は文化庁長官表彰「文化芸術創造都市部門」を受賞した。

職員総数を大胆に削減する一方で、区長就任時にわずかであった区長部局の文化担当職員は徐々に増員されていった。2006年には文化商工部が新設され、08年には教育委員会から図書館も移管され、現在では約90名が同部に所属している。行財政改革を進める一方で、様々なハードルを超え、文化都市への道を一步一步切り拓いてきたのは、高野区長の信念とイニシアティブにほかならないだろう。

創造都市の代表例として日本にもたびたび紹介される仏ナント市。1989年に登場したエロー市長は、造船業の衰退ですっかり疲弊した

同市を文化で再生することを公約に当選した。以来、数々の文化事業を立ち上げ、ナントはフランスで最も住みたい都市と言われるまでになった^{※5}。このように欧州の創造都市は、脱工業化による産業・経済の落ち込みと疲弊から、芸術文化や創造産業の振興によって再生したと言われている。

23区最下位という財政の危機的状況から、文化行政を主軸に据えて活力を取り戻した豊島区には、欧州の創造都市に通じる点がある。だが、思い返せば池袋モンパルナスやトキワ荘の時代から、豊島区には創造都市のDNAが根付いていた。

高野区政が誕生して13年。創造的な力は再び息吹を与えられ、地域の未来を紡ぎ出そうとしている。

※4 提言の冒頭「はじめに」には、福原座長自身の文章によって、そのいきさつが綴られている。

※5 エロー市長は2012年5月、フランスの首相に就任した。